

イエス受洗

ルカによる福音 3:15-16、21-22

(そのとき、) 民衆はメシアを待ち望んでいて、ヨハネについて、もしかしたら彼がメシアではないかと、皆心の中で考えていた。そこで、ヨハネは皆に向かって言った。「わたしはあなたたちに水で洗礼を授けるが、わたしよりも優れた方が来られる。わたしは、その方の履物のひもを解く値打ちもない。その方は、聖霊と火であなたたちに洗礼をお授けになる。

民衆が皆洗礼を受け、イエスも洗礼を受けて祈っておられると、天が開け、聖霊が鳩のように目に見える姿でイエスの上に降って来た。すると、「あなたはわたしの愛する子、わたしの心に適う者」という声が、天から聞こえた。

説教

わたしたちはお話しの中で生きています。お話しの中でしか生きることができないのかもしれませんが、しかし、現実はお話し・物語・ストーリーのいずれでもありません。現実には現実で、お話しはただのお話しでしかありません。でも、わたしたちは現実をお話しの中でしか、お話しを通してしか理解する、受け入れることができません。現実の意味を与えよう、持たせようとするヒトは物語に頼ります。ナマのまま現実を受け入れることはなかなか難しいことです。

洗礼は一種のお話しです。洗礼に意味を持たせて現実を変えることができると信じる意味合いで洗礼は物語です。

イエスがバプテスマ(洗礼者)のヨハネから洗礼を受けたという記録はマタイ・マルコ・ルカ・ヨハネのいずれにも記述があります。

その翌日、ヨハネは、自分の方へイエスが来られるのを見て言った。「見よ、世の罪を取り除く神の小羊だ。『わたしの後から一人の人が来られる。その方はわたしにまさる。わたしよりも先におられたからである』とわたしが言ったのは、この方のことである。わたしはこの方を知らなかった。しかし、この方がイスラエルに現

れるために、わたしは、水で洗礼を授けに来た。」そしてヨハネは証しした。「わたしは、“霊”が鳩のように天から降って、この方の上にとどまるのを見た。わたしはこの方を知らなかった。しかし、水で洗礼を授けるためにわたしをお遣わしになった方が、『“霊”が降って、ある人にとどまるのを見たら、その人が、聖霊によって洗礼を授ける人である』とわたしに言われた。わたしはそれを見た。だから、この方こそ神の子であると証ししたのである。」ヨハネ 1:29-34

このようにヨハネ福音書 1:29 以下の記録ではイエスが洗礼を受けたのか受けていないのかハッキリとは記述されていません。あたりまえの常識だから記録しなかったのか、受けたことになっているのでわざわざ受けていないと記述することをためらったのかはわかりませんが、含みを持たせた記録になっています。そしてどの福音書にも「イエスが誰かに洗礼を授けた」という記録はありません。

「目から鱗が落ちる」と同じように「洗礼を受ける」は日本語の慣用句になっています。宗教用語が慣用句になることは少なくありませんが、キリスト教用語が慣用句になることは日本ではめずらしいことです。それだけ「洗礼」ということばには日本語パワーがあるのでしょうか。

洗礼はキリスト教の入信儀礼です。また、洗礼はストーリーの中で生きるため、ストーリーの中に入るための儀礼としての物語です。さきほど現実に意味を与えよう、持たせようとするヒトは物語に頼るといいました。キリスト教は物語の小道具として洗礼儀礼を発明したともいえます。キリスト教にはいろいろな派閥がありますが入信儀礼に洗礼なしの会派はわたしの知る限りではありません。

キリスト教のなかでもそろそろ洗礼儀礼を見直すうごきもあるようです。どこまで伝統を守るか、世間の変化についていかないと伝統死守が衰退の道になるんじゃないかという意見もあるようです。実際のところキリスト教に限らず宗教一般は衰退しています。宗教のつくりだしてきた物語が現実を映し出していない絵空事になっているのかもしれない。

今年は福音書に記録されているイエスの物語を現代の物語として読み直す一年にします。主の恵みがありますように。
